シンドローム

古代山城症候群

(Part1, Part2 前・後)

秦田東国著

第二水門通水口

第二水門集水口

城壁の背面

古代山城症候群（シンドローム） Part1 東田東国

■今何故古代山城か

昨年暮れも押しせまった時期にかなりドタバタとした感じで発足した私達『城郭研究部会』は、今その活動のひとつの軸として、神籠石－朝鮮式山城の解明ということを据えている。

朝鮮式山城とは、時期的には６～７世紀、わが国が公民国家体制に収斂していく過程に於いて、ほとんど唐突といった感じで発生し、消滅していった軍事施設であり、また今のところ九州北部と瀬戸内海沿岸にしか存在しないという特徴を持っている。

ちなみに言うなら、我が備後の国にも文献上「常城」「茨城」の二城があったことになっているが、まだその位置は確実には判明していない。

古代山城に関わる謎はあまたあるであろうが、大まかに言うなら、それは（イ）誰が［築造主体］（ロ）何時［築造時期］（ハ）何のために［築造目的］という問いに類別できよう。

そして、その答えが個々の山城に於いて一様でないところに、この研究のややこしさがある。例えば、大和政権が対外防衛のために築いたとされる城もある。また、どうも地方勢力によって築かれたらしいと思われる山城もある。

しかも、そういうところには必ずと言っていい程、大和に対する反乱伝承が伝わっている。とするなら、先にあげた大和製山城もそのいくつかは、もともとは対国内戦用に構築されたものではないかとの疑問も湧いてきて、要するに、何ひとつ確からしいものは残らぬようになっている。

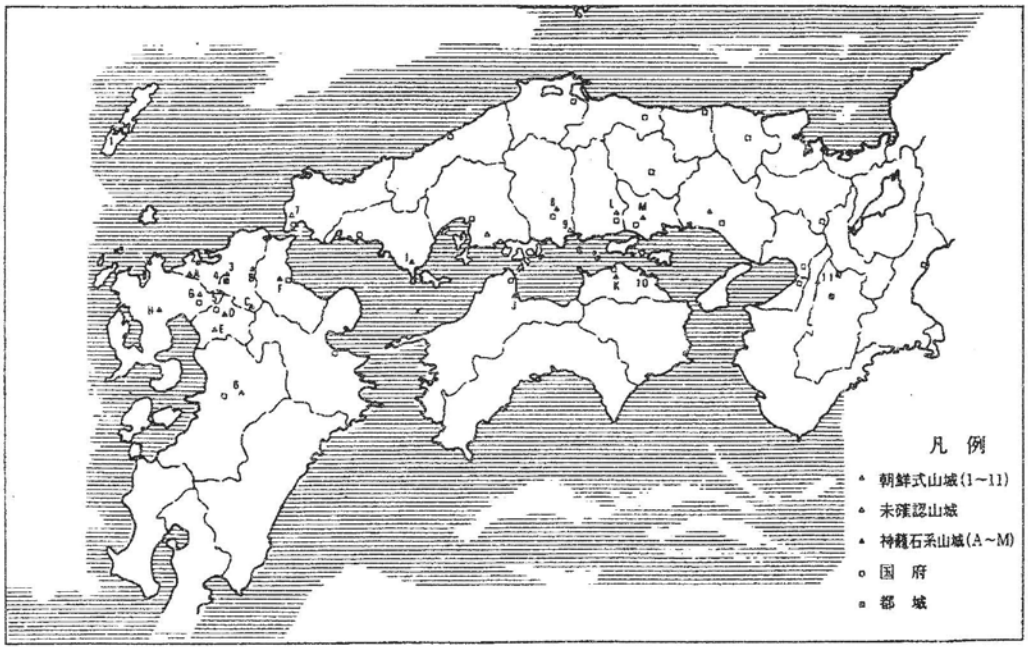
しかし、逆に言うなら、この程度のことでさえ議論百出定まらないのが古代史の現在であり、私の予感を言うなら、この不確実さというものは、従来あたかも自然的な推移であるかの如く語られてきた畿内勢力による国家統合という〈確からしさ〉に対し、激しく修

正を迫るものとなるかもしれない。

山城は軍事施設であり、軍事施設であるということは、それが実際に使用されたか否かにかかわらず、古墳の分布などとはまた違った赤裸々な時代の相を写し出すであろうからである。

今回は第一回目であり、私自身の蓄積もあまり無いので、古代山城についての概要と若干のコメントを付しておくに止めるが、回を追って古代山城のはらむ問題を取り上げて行きたい。その中で、古代吉備国とか吉備国に於ける備後国の位置とかも当然対象になってくるであろう。

■古代山城の概要



1	金田城	7	長門城	A	雷山	G	帯隈山
2	怡土城	8	常城	B	鹿毛馬	H	おつぼ山
3	大野城	9	茨城	C	杷木	I	石城山
4	水城	10	屋島城	D	高良山	J	永納山
5	基肄城	11	高安城	E	女山	K	城山
6	鞠智城			F	御所ヶ谷	L	鬼ノ城
						M	大廻小廻

古代山城分布図

（鬼ノ城学術調査委員会刊『鬼ノ城』より転載）　P.2

先ほどから、古代山城とか、朝鮮式山城とか、神籠石とか、適当に言葉を使っている感があるので、まず、これらの名称をきっちり押さえておこうと思う。

前頁図に見られる様に、古代山城は朝鮮式山城と神籠石系山城に分けられており、この二系統有るところに、日本の古代山城研究の歴史も同時に語られているからだ。

まず、朝鮮式山城とは、６６０年百済が唐・新羅連合軍に滅ぼされ、６６３年百済再興のために日本から派遣した軍隊も白村江の海戦で尽く敗れるという、半島での政治情勢の激化に対応するために、天智朝が国策として構築した、対馬－北九州－瀬戸内沿岸－畿内と広域にわたる本土防衛のための山城である。

これらは全て『日本書紀』に記載があり、築造主体・時期・目的が一応明らかである。

６６４年（天智三年）	対馬・壱岐・筑紫に防人と烽を置く。筑紫に大堤を築いて水を貯えしむ。これを水城という。
６６５年（天智四年）	達率、答炑春初を遣わして長門に城を築く。達率、憶礼福留、四比福天を筑紫に遣わして大野、椽の二城を築く。
６６７年（天智六年）	倭国に高安城、讃岐に屋島城、対馬に金田城を築く。
６７０年（天智九年）	また長門に城一、筑紫に城二を築く。

見られる如く、これらの山城は亡命百済軍人の指導によって築かれたものであり、当然のことだが、朝鮮に数千単位で存在する山城と極めて構造が類似するところから朝鮮式山城の名称が与えられた。

他にも朝鮮式山城と呼ばれるものはあるが、大体朝鮮式－神籠石系の区別は、ただ『日本書紀』『続日本紀』等の正史に記載があるか否かといったことにすぎないため、山城の性格としてはずい分まちまちであろうと考えられ、天智年間の対外緊張の産物としては、

一応上記グループまでがワンセットであろうと思われる。

例えば、茨城、常城、鞠智城は築城年代が明らかでない。かつ鞠智城は本土防衛構想から見ると、非常に意味のないような場所に在る。

（天智期の築城が対外情勢への対応の産物であるとは、どの本を開いても書いてあることでもあり、私もそう思うが、例えば、次のような疑問にはどう答えるのであろうか。

「四国の屋島の城は、倭国最後の防衛拠点であると言われるが、もし唐の水軍が屋島を無視して、そのまま畿内へ攻め入ったとするならどうするのだろう」

これは笑い話ではない。防衛とは、その場所に応じて異なった形態をとるべきはずのものである。例えば、対馬・北九州は侵略群にとっては当然押さえておかなければならない兵站地であり、ここでは内陸戦を含むものである。

しかし、瀬戸内海は敵にとってただ通過すれば良いところであって、これを阻むものは水軍を中心とした戦いである。ことさら大きな山城など必要としないはずである。

さて、これらのことをふまえて、天智期の築城とは何かと問うてみると、それは倭国侵略に備えるものであると同時に、対外的脅威が呼び起こすであろう内的危機－地方豪族の不平不満をバックとした内乱－に対処するという二重の目的を持ったものであったと言ってさしつかえ無かろう。

私はまだ手を付けていないが、朝鮮三国からの渡来人の分布図とこの山城の場所を付き合わせて見たら、案外面白い結果が出るのではあるまいか。）

一方神籠石の方は、明治年間に「神籠石論争」なるものが、その性格付けをめぐって争われた様に、それはつい最近まで山城であるとは認められなかった。

神籠石は朝鮮式山城と同じく、列石が山頂をとりまく形で続いているのだが、一見してわかる違いは、この石列があまりにもきれいにすき間なく並んでることである。かつ、この列石が一段しかつま

れていないことが、防衛目的というには少し弱いところであった。

しかも、列石で囲まれていた内部には、ほとんどの場合神社が存在することから、これは神域を他所から分離区別するためのものであろうとされた。

ところが、戦後、おつぼ山の発掘調査で、列石と版築土塁が組み合わさっている部分が発見され、列石は単独であるのでなく、土塁の土止めとして使われたものとして神籠石＝山城説の方が有力になって来たのである。

築造年代については、先の天智年間の山城よりさかのぼるであろうことは、大方の認めるところである。（天智期の築城にしても、それが一年や二年で造られるものではないことから、もともとあった神籠石系の山城を修復したものが、朝鮮式山城と呼ばれるものではあるのではないかという説もあり、なかなか魅力のある考え方であると思う。）

しかし、その時期がいつまでさかのぼるのかについては、築城目的と同じく説が分かれている。

（1）地方勢力が対大和の反乱の拠点として築いた。鬼の城・大廻・小廻（あるいは城山も）は吉備の反乱、九州の神籠石は磐井の反乱に使われたとする。時期的には五世紀末から六世紀前半（しかし、反乱そのものでなく、対峙の時期とすれば、もう少し後でも良い）。

（2）逆に、大和勢力が地方勢力を圧するために造ったものとする。時期的には屯倉を設置したころ（六世紀半ば）から国府の附属山城として造った（七世紀）ころまで、さまざま。

（3）山城が攻撃用に転化できる程密集していないので、渡来人がもっぱら「逃げ込み」用の城として造ったものとする。六世紀以後。

以上が大体主だった説である。いずれが真かを判断する材料が少なすぎるのでどうこう言えないが、私が魅力を感じる説は（1）である。大和側の正史に記録されていないというのは、やはり別の主

体によって作られたと考えても良いのではあるまいか。

それと、九州にしろ、吉備にしろ、山城のあるところには不思議と渡来人の存在を匂わせる材料が多い。渡来集団のあり様といったものが、従来「帰化人」としてとらえられていたよりも、はるかにスケールの大きい（それは文化集団・技術集団であるばかりでなく、政治集団であったという様に）ものであったという説も、最近では認められているようであるから、それを信ずるならば（1）と（3）は別に矛盾しないであろうと言える。

■反乱伝承としての「温羅伝説」

朝鮮式山城は、わが国に於て果たして実際役に立ったのかという疑問は、山城を研究する過程でだれでも一度は想い廻らすものであろうが、「温羅伝説」は古代山城が戦闘に使われたとする、ほとんど唯一の説話である。

> 昔、鬼の城一帯には朝鮮から渡って来た温羅という一族が勢力をふるっていました。その頃、吉備津彦命が吉備を平定するため大軍をひきいてこられたので、住民は温羅退治をお願いしました。両軍は鬼の城と中山に陣所をおいて激しく闘いました。

まだまだ話は続くがこれ位にして、この説話の原型は、征服者が被征服者の名前をもらうことによって、その地方の始祖となるという一種の服属譚であり、物語としての体裁がととのったのは、室町時代といわれるが断片的な伝承としては、もっとさかのぼることができるのではなかろうか。

例えば、鬼の城をめぐって戦闘が行われたという記述を、国家的統合を目論む大和政権と、これに対する吉備の勢力の間に緊張した時期があり、その様な情勢の中で山城は造られていったという風に解すれば、これは歴史の問題となる。それでは、その様な時期とはいったい何時なのであろうか。

『日本書紀』には雄略紀を中心に吉備の反乱を伝えるものが数回

にわたって登場するが、その中で反乱の名に値するのは４７９年の星川皇子の反乱であると思われる。

> この年雄略天皇没す。母である吉備稚媛にそそのかされた星川皇子は、大蔵の宮を押さえんとして誅殺される。この乱の知らせを受けて、吉備上道臣等は星川皇子を救うため軍船四十艘を率いて畿内に向うが、すでに乱は静められたと知って空しく引き返した。天皇は上道臣等を責めて、その領する山部を奪われた。

大和勢力が吉備の小反乱を契機として、徐々に吉備の勢力をそいで行く、その始まりである。ここに言う「山部」とは大和朝廷で直轄領の山林を管理した品部であり、造船・製鉄のための燃料に関わる。

吉備が強いと言われれていたのは、その鉄と水軍のためであり、これで、その一画が押さえられたわけである。ここで想い起こすのは、温羅と鍛冶・製鉄集団との結び付きである。

熊山淑弘さんの『温羅の鬼の城』（『幻の高安城』第四集）によるならば、「矢が片目を射ぬいた」こと「温羅の流す血が血吸川となった」こと「温羅が雉に変身して逃げようとした」こと、全て鍛冶集団の存在を指し示す寓話であるとされている。「山部を奪う」と一言で言っても、その統制には大和側も長い年月にわたって手を焼いたのではあるまいか。温羅伝承は、こんな歴史の中に原型を持っているに違いない。

続いて『書紀』安閑天皇二年（５３３年）には屯倉を集中的に設置した記事が見られる。それも播磨国に二つ、備後国（井原辺りと思われる）五ケ所、婀娜国（神辺平野）二ケ所という風に、吉備を東西から包囲する形である。ここで、備後の国（現在の）が大和勢力による吉備攻略の拠点となっていることは重要である。

おそらく、この頃から欽明十六～十七年（５５５～５５６年）吉備の中枢に、白猪屯倉、児島屯倉という最後の楔が打ち込まれるまでの間が、吉備勢力最後の力をふりしぼっての大和勢力との攻防の

時期であったのだ。鬼の城が少なくとも現在の如くに整備されたのは、この時期であると思われる。

そして「茨城」「常城」とは大和勢力が吉備攻略のために対向上、この備後の地に築いたものではないか。相対立する勢力が互いに朝鮮式山城を拠点として抗争をくり広げる－こんな妄想を抱いているのは現在私（達）だけであるかも知れず、もし、もっと納得のいく説に出会ったなら、すぐにもこの妄想はエイヤッと投げ捨てて、足で踏みにじり、唾の二、三回でもかけてやろうかといった卑屈な心算ですが、鬼の城が正史に記載なく、茨城、常城が官製であるにもかかわらず、築城時期・目的共に明らかでないことの一応の証明にはなっていると思う。

「お前のいう様な攻防戦は正史にないではないか」と言われる向きには、大和朝廷の方針だからじゃないですか、と答えておくしかない。『記・紀』の史観によるなら、朝廷のやる戦は「言向けやはす」といったものであったらしいからである。

■あとがき

どうも知っていることを全部並べたという感じで、底の浅さが透けて見えて恥ずかしいかぎりである。しかも、本来ならば、現在までの山城研究の歴史と成果を克明に追わねばならぬところ、のっけから憶測・推測の類となってしまった。

しかし、この文で私が示したかったのは、何よりもこれからの自分の学習の向う方向性である。人はこの一文を〈ザル理論〉と呼ぶかも知れず、私もまたそう思うが、ザルならば、より大きなザルを作りたい。よしや、そのことのために漏らす水の量が増えようとも大きな獲物をとるのは大きなザルによるしかないから。

古代山城症候群（シンドローム） Ｐａｒｔ２〈前編〉

■話しはまだまだ始まらない

２ケ月というのは何と短いことであるか。ついこの間『山城志』２号の原稿を渡したばかりの様な気がするが、もう今回の〆切りがせまっている。

もっとも、この間、例会２回、談話会２回をペース通りこなしており、その他に部会活動を３日行っているのだから、無理もないと言えば言える。断っておくが、私等は皆、日本の正しい勤め人であり、決して『山城志』のアガリで食っている訳ではない。

今だから言おう。私の構想はこうであった。すでに『常城についての雑感』で、私の今後の研究の方向は過たず明らかにされている。

当面の部会の活動としては、次の様なことを考えています。

①地名の起こり
②山岳信仰
③神社・仏閣の成立史
④古代政治・軍事史
⑤国府・軍団
⑥東アジアの古代政治・軍事
⑦渡来集団とその文化遺跡
⑧考古学一般

総じて古代山城のはらむ謎をその周辺から解明していく方向・・・云々。

いずれもその一つだけで、本の２冊や３冊できそうな大きなテーマである。つまり、私のつもりではＰａｒｔ１において、古代山城の概略を述べ、Ｐａｒｔ２からは、これらのテーマに、ひとつひとつ拠点を落とすが如く迫っていくはずであったのだ。

かくして、この連載はＰａｒｔ１００になっても終わらない予定

であったのに、上述の理由で、まだ全然実体的に迫られていないのであった。

幸か不幸か、私はこの間、古代の山城についての発表会をやっており、それが時間の制約とあまりの早口で良く聞きとれないと、大変不評であったので「そうだ、そうだ。アレがあったのだ」と想い出し、アレを少しふくらまして今回はお茶をにごそうと思う。

賢明な読者には「前回とおんなじじゃねいか。ケッ」と馬鹿にされそうな気がするが「どうもまいりましたなあ、ヘッヘッヘ」と卑屈な笑いでゴマかしても、まるで受けなかったりして。

■講演会風に

えー、ただ今紹介に預かりましたナツメダでございます。あっ、どうもどうも（拍手）。

今日は、古代山城について発表するということなんですけれども、実を申しますと私は、山城どころか古代史に興味を持ち始めたのが、半年前でありまして、こうやって人前で話すこと自体、身の程知らずという感じもするんですけれど、まあ、それはそれとしまして、要するに朝鮮式山城というものは面白い。素人の私がヒョイと跳び込んで、そのままやみつきになってしまう位面白い謎を多く含んでいるということです。

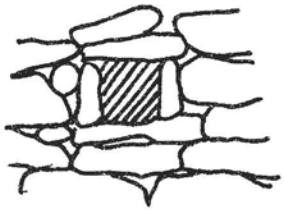
今日これから話しますことは、まあ皆さんがどのくらい朝鮮式山城について御存知かはよくは解らないのですけれど、一応、朝鮮式山城とは何か知っている、また、見たことがある、しかし、それに対して現在どのくらい研究というものが、いわゆる学会のですね、進んでいるかについては良く知らない、という方がおられるとして、そういう方を対象に話を進めて行きたいと思います。

この前、鬼の城を見られた（１月例会）方は良くお解りでしょうが、あの様に３００～４００ｍの山の頂上あたりを石塁や土塁でぐるりと囲む、また、その内部に必ず一つ以上の谷を含み、そこに石で水門等を設えるというのが、典型的な朝鮮式山城というものです。

あれを見られて皆さんが、何を感じられた良く解りませんが、私が初めてあれを見た時思ったことは、こんな規模の大きな建造物を、

それは例えば、畿内の天皇陵などと比べても遜色ないと思いますが、なぜ自分は今までその存在すら知らずにきたのだろうかということでした。

その後、いろいろと資料等あさりまして、私はその時ウスラぼんやり考えたことが、かなりいい線をいく種類の疑問であったのだなあと少々自信を持った訳です。



水　門

ここに西川宏さんの書かれた『消されていた朝鮮式山城』という論文のコピーがありますが、これを見ますと、山城そのものばかりでなく、わが国における山城研究の歴史の中にも中々興味深いドラマが潜んでいることが解ります。

> 日本の考古学会では、昔から余り論争といったものはやられていないが、数少ない論争の中に、明治末から大正初めの神籠石論争は、文献史家、民俗学者をも巻き込んだ華々しいものであった。（中略）だが不思議なことに、この種の大規模で顕著な遺跡に対する考古学的な研究は、極めて少数の人の研究対象にしかならず、それも九州、東北のものに関心が集中し、瀬戸内、近畿地方のものは不当に無視されがちであった。その間、豊元国氏の備後常城の調査は注目すべきものであったが、これまた学会から孤立したものとして終わった。結局、朝鮮式山城は、その対象地域の点でも、また、調査者の点でも中央は軽視し、地方において細々とやられてきたという大きな特色を持っているのである。

結局、西川氏の言う『消されていた』という表現は、朝鮮式山城というものが、中央学会において研究対象として不当に扱われてきたということでありまして「そーか、それで俺が知らなかったんだな」と一応の疑問は解けたのですが、この論文の中に使われている

「不当に」「無視され」「孤立した」という表現は、私、非常に好きでして、このことがますますこの問題にのめり込む結果を生んだ訳です。

といいますのは、私は長らく近代史をやっておりまして、その中で特に草莽（そうもう、こころ有るインテリゲンチャの意）と呼ばれる人々に心魅かれておったのですが、この草莽こそまさしく「不当に無視され」「誤り伝えられ」歴史の中でどの様な位置をも与えられない「孤立した」ものとして、それは在ったからで、この様に人が何とか隠そう隠そうとするもの、無視してすり抜けようとするもの、それらは多くの場合、素敵に重大な問題をその内に孕んでいるのだという解釈は、いわば、私の性癖にまでなっているからです。

ここで、神籠石論争といわれる朝鮮式山城をめぐっての論争が、一時期、学会をにぎわし、そして一斉に潮の引く如く沈黙していった過程と、日本近代の歴史の流れをつき合わせて見ることで、朝鮮式山城のもつ問題性を浮き彫りにしてみたいというのが、私の関心のあり方その①です。

ここに言われております「神籠石論争」なるものは、九州地方にあります高良山とか女山とかの、山上列石の性格をめぐって行われたものでして、その内容に関しましては、古い資料でありますので、中々見る機会がないのですが、論文の標題やまた、聞き話およその感じはつかむことができます。

私の持っております古代山城文献目録によりますと、この論争の火付け役であり、また、発表論文の数も一番多いという人が、喜田貞吉という人ですが、『神籠石と磐境』『神籠石は果たして山城か』という様な論文名から推して、神籠石非山城説の有力な主張者であったと思われます。

古代の信仰対象として、磐座というものがあり、その祭祀の場所である磐境が、この列石で囲まれた部分であるという神籠石＝祭祀遺跡説がその内容ですが、これに対して関野貞、谷井済一という人々が『所謂神籠石は山城祉なり』として、喜田説に反駁の論陣をはったというのが、この論争の大まかな経過です。

しかしながら、この内容に関しましてはＰａｒｔ１にも書いた様

に現在すでに決着がついておりまして、特に今この論争に関わらねばならない理由というのは全くありません。それではなぜわざわざこの問題をムシ返したかというと、こおいうことです。

年代	論文数	年代	論文数
明治		大正	
３１	1	1	1
３２	1	2	１０
３３	6	3	6
３４	1	4	2
３５	4	5	
３６	3	6	
３７		7	1
３８		8	1
３９		9	
４０		１０	
４１	2	1	
４２		１２	
４３	１９		
４４	1		

この神籠石論争は「歴史地理」とか「考古学雑誌」とかいった当時の専門誌上で専門の学者の間におこなわれたものですが、およそ「○○論争」というものが成り立つには、この様な学者だけでなしに、歴史研究のすそ野を形成している私でありますとか、皆さんの様な方々の一定程度の関心というものが存在し、そのことについてもっと知りたいんだとか、そおいう雰囲気の様なものが、なければならない、そおいうことが必須の条件であると考えられます。

それでは、その時代的雰囲気とは何か。それを考えるために、上ような表を作ってみました。

これは神籠石についての研究発表の数を年ごとに表記したものですけれど、これを説明しますと、論文数のピークが明治３３～３６年頃、そして明治４３年から大正２、３年にかけて存在します。そして、大正８年以降、戦後に至るまで、この種の研究というものは多少の例外は含みつつも、表面には現れてきません。

この時代は政治史的にはどの様な時代であったかといいますと、まず、第一期のピークは、日清戦争と日露戦争にはさまれた１０年間の内にすっぽりとはまります。

そして、第二期のピークであります明治４３年というのは、日韓併合の行われた年であります。これらはいずれも朝鮮というものが、政治的にも軍事的にも、国民大衆の意識の上に大きく登場してくる

時期であったといえると思います。

日本における朝鮮式山城の研究が、朝鮮に対する侵略・植民地支配という政治動向を機として発生し、それに続く民族的蔑視という時代状況の中で、この研究が持続されねばならなかった困難さというものを、この表の数字はよく表わしていると思います。このことについて、先の西川さんは次のように結んでおられます。

> かつて中央のアカデミズムの学者たちは、一度論争を起こしながら、やがて忘れていった。あえていうならば、それは学会の関心事から消されたのである。それはなぜであろうか。朝鮮に対する植民地支配に研究方法までが毒されたからではないのか。皇国史観に迎合していったからではないだろうか。西日本各地の朝鮮式山城跡を消そうとした古代政権と近代アカデミシャン、かれらの思想の中に等しく貫かれているもの、それは天皇制である。

朝鮮式山城、特に神籠石系山城というものは、執拗に歴史から抹殺されようとして来ました。一度目は、古代貴族の意を汲む御用史家によって、そして二度目は、明治の学者が何となくそれを研究していくことに不安をおぼえ、自ら研究することを規制していったことによって、という風にです。

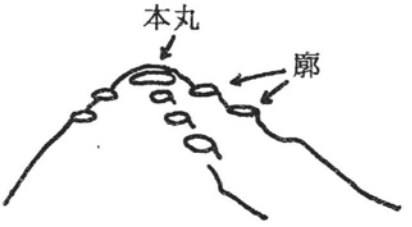
しかしながら、このことは同時に、古代山城というものが、国家の成り立ちの根底の部分に深く関わっていることの証明であると思います。そして、今後、古代山城の解明が進めば進む程、古代史の「常識」というものは全く覆されてしまうだろう、そおいう予感を今持っています。

（だんだん話し言葉で書くのが苦しくなってきたが）えー、それではこの門題はこれ位にしておきまして、次は、現在、朝鮮式山城に対する研究はどうなっておるのか、どの辺まで進んでおるのか、ということにつきまして、若干は話していきたいと思います。

先程、朝鮮式山城の構造のおりに少しふれておきましたが、朝鮮式山城というのは、例えば、日本の中世以降の山城と比較して大変

異なっている。それは形態が異なっているだけでなく「城」というものに対する思想が違うんだ、ということをまず頭の中に置いてもらいたいと思います。

日本の山城というものを絵に画いて見ますと、頂上を本丸とし、稜線にそって廓が造られると言う放射性構造をなしています。



中世山城

それに対して、朝鮮式山城は山頂部をぐるりととりまく円環構造というべき形をしています。この違いがどおいうことを意味するかといいますと、まず、場内面積が格段に違う。ということは、内にこもれる人数に大変な差があるということです。

朝鮮式山城

これを、も少し詳しく言いますと、中世山城と言いますのは、特殊な戦闘集団のみが、こもれれば良かったし、それに見合った規模と設備があればすんだのですが、朝鮮式山城の場合は、付近の住民の全てが、事ある時そこに避難する、「逃げ込み城」的な性格を強く持っておるということです。朝鮮式山城の特徴とされる水門を始めとする給排水設備や、倉庫群の存在などは、全てこの性格を指し示しているといえましょう。

この様に、同じ山城とはいっても、古代と中世のそれでは全く性格が異なるのでありまして、古代山城の発展として、また、いちバリエーションとして、中世の山城がある訳ではないというのは大切なところです。

それでは話しの順序としまして、元祖朝鮮における山城はどうなっておるのか、ということについても若干ふれておきましょう。

まず、山城の数ですが、日本の場合、現在２３ケ所しか発見されておりませんが、朝鮮では、さすが本家本元えらいという感じで、

だいたい１５００から２０００の数が確認されております。さらに日本の場合と異なりまして、朝鮮では、この山城の使用された期間が非常に長いということが特徴であります。

朝鮮半島では、三韓時代に高地性集落というものが発生しまして、これが三国時代に至っての山城（日本でいう朝鮮式山城）の原初的形態であるとされています。なぜそう言えるかというと、この高地性集落の遺跡（壕でありますとか、貝塚でありますとか）と同じ場所に（つまりそれを利用する形で）山城の石累等が発見されるという例が非常に多いからです。

さらに驚くべきことには、この山城と山城を主体とした戦闘方式というものは、中世以後も生き続け、大体、李朝末期頃まで修復に修復を重ねつつ、その命脈を保ったと言われております。

このことは朝鮮における山城の方式が、その地形や風土、政治的環境に良く合致したものであったということと同時に、伝統的な生活思想から生み出されたものであるということを、良く語っていると思います。

これを図式化しますと朝鮮においては

高地性集落　→　（朝鮮式）山城　　（→は正しい発展）

であるのに対して日本では

高地性集落…朝鮮式山城…中世山城　　（…は不連続）

という風に場所的に利用されないのみならず、戦闘方式や城をめぐっての概念にまで断絶があるというのが特色です。

この日本の場合の山城の発展段階の不連続の現象に注目し、ユニークな学説を発表されている歴史学者に李進熙さんがあげられます。

（突然ではあるが、ここでタイムリミットが来てしまった。これから李氏の説を紹介し、その後、神籠石系山城に関する前回あげておいた諸説について、私なりの検討を加えてみる予定であったが、少しばかり時間が足りなかった。加えて李氏の説は通り一遍の紹介で終わらすには余りに惜しい内容である。そこで、今回の分を一応Ｐａｒｔ２の〈前編〉とし、次回に〈後編〉をのせるということで、この事態の収拾策としたい。ごく私的な雑誌と限られた読者という『山城志』の条件に今回は全面的に甘えることにした。今はただ眠い－。）

古代山城症候群（シンドローム） Part2〈後編〉

前回書いたのが、確か三月の中頃のような気がするが、もしこの記憶に誤りがなければ、実に半年もたっていることになる。いまさら〈後編〉というのもシラけた感じだが仕方あるまい。

〈前編〉との繋がりをつけるために、古い『山城志』を引っぱり出してみると、前回は朝鮮式山城が、日本の戦闘方式の流れの中で、それ以前ともそれ以後とも断絶したものとして存在している、というところで終わっている。

「フムフムなかなかいいところを突いておるわい」とあらためて自分で感心するのも変なものだが、ウチの連中は他人をホメルということを知らないので、自分で言ってみるしかないのだ。

さてこの間、いろいろと文献などを漁ってみたが、依然として朝鮮式山城の謎は、この山城の突如とした現出（私によって症候群と名付けられた）と、それ以後の日本の風土に根付かなかったことの不可解さにある。この謎を避けて通る幾多の築城説は、全て「言ってみるだけ」のものにすぎないことは、ゆーまでもない。

試みに前回『山城志』の巻頭を飾った田口論文「備後城郭史」を俎上に載せてみよう。

同論文は、図入り、系図入りでもっともらしい体裁を粧っているが、その実「常城・茨城は芦田郡と安那郡にある」→「穴国造と品遅国造は倭政権寄りである」→「故に常城・茨城は倭政権の対吉備攻略軍事拠点としてつくられた」というのが骨子であるにすぎない。

この説は非常に魅力にとんだものであり、確か私も言ったことがある様な気がするが、それというのも、この備南の地が倭政権の吉備攻略の拠点としてまず押さえられたとことが、この地域の古墳などのあり様から、ほぼ確実視されるからであり、さらにもう一つは文献資料上からみて、常城・茨城の築城主体が倭政権（気になる用語だけど、行きがかり上使うね）であろうことも、また確からしいことからである。

しかしながら、この二つのことは無媒介に結びつけられてよいも

のであろうか。だいたい「拠点」だの「押さえ」だの簡単にいってくれるが、神辺平野の北か、府中の火呑山か、あるいは福山の蔵王山か知らぬけど、そこに一つ、二つ山城を築くことがどうして「吉備に対する押さえ」となるのだろうか、というごくあたりまえの疑問さえここには無いのである。

常城・茨城はまだ見つかっていないため何とも言えないけれど、鬼の城を始めとする瀬戸内の山城を見る限り、どう見ても最終的な逃げ城的なもの以外には考えられないし、国内の局地戦において山城を主体とした戦闘が古代に行われたことは、他の凡ゆる軍事施設との関連の中においても、どうも合点がいかぬのである。

山城を落したり、落とされたりということで進展してゆく戦闘のイメージは、恐らくは中世史研究者としての田口君の性癖によるものであろうけれども、その中世にしたところで全国に山城が数千単位で存在し、一つの山城が三つ四つの支城と地形を利用した要害とで、点としてではなく、線や面として有機的に気の機能できて、始めて山城というものが戦闘の中で生きて来たはずである。

この様に、古代山城を軍事的側面に引き付けて理解しようとする時、（それは、例えば、地方豪族の反乱や国府附属山城説などに代表されるが）果たして古代山城はそのような目的に合致するものであるのかとの疑惑は、押さえることが出来ぬのである。

かといって「訳のわからぬものは何でも祭祀遺跡」とする怠惰な考え方（私は古代山城聖域説が全く間違っているとは思わない。ある共同体が、その命運を託するものならば、それは当然聖域の性格も持つと言うまでの話だと思っている。例えば、純粋戦闘具たる剣や鉾でさえ、そのイミテーションが奉納されたり、死者に共葬されたりする古代人の信仰のあり方を見よ）にも組みすることは出来ぬ。

こうなってくると、原田大六氏の様に「古代の文化財だからといって無条件に貴い訳ではないのだ」と神籠石＝「愚城」論が出てくるのも故無しとはしないが、これは、ひとつには古代の戦略・戦術というものが、我々に全くイメージされないためである。

今ではほとんど確実しされている天智年間の築城の山城さえ、それがどの様に具体的に大和防衛という目的にかなっているのか説明

できるものはおるまい。まして、神籠石－朝鮮式山城の築かれた6～7世紀（これは石組の技術から割り出している）という時期が、国家としてどの様な段階であり、その構成内部にいかなる変換が行われつつあったかということを、山城の立地や構造の差同とからめて展開する論には、めったにおめにかかれないのである。

■渡来人築城説

李進熙氏による「渡来人築城説」は単に築城主体が渡来人だと言っているだけなのではない。

従前の説では、築城主体が畿内勢力であるにせよ、他の地方豪族であるにせよ、仮に、もしそれが正しいものであったとしても「ああそうだったんですかぁー」で終わってしまうしろものであり、要するに「謎解き」にすぎないのだが、李氏の説は例えば「国家以前とはどの様なものであったのか」というような、古代史の根幹にふれる問いと分かち難く結びついて出てくるところに特色がある。この一点において、私は李進熙とゆう人の歴史感覚の鋭さにほとんどまいってしまっているのだ。

『日本書紀』によるならば、天智称制三年、つまり白村江の海戦で日本海軍が壊滅的打撃を受けた翌年から、北九州、瀬戸内、畿内を中心とする地域に集中的に山城が造られる。そして、その築城指導は百済からの亡命将軍らの手によって行われた。

> この天智年間の築城は新羅と唐軍の攻撃から大和を防衛するためだったといわれている。単純に言えば、そうなのかもしれない。しかし、大和防衛のためになぜ伝統的な戦闘方式と異なる朝鮮式山城を突如として採用したのだろうかという疑問は残る。すぐれた築城技術が百済からやってきたとしても、戦の方法はそう簡単に変わるものではないからである。しかも、百済は山城をよりどころとする戦いで敗れ、王朝までも滅んだのである。（『鬼の城の渡来人』）

ここでは二つの疑問が語られている。前の年の戦勝で勢いにのっ

た唐・新羅連合軍が、日本に来襲するのは今日か明日かという切迫した状況で、付け焼き刃のような山城構築が本当に役に立つのか。あるいは、それは本当に付け焼き刃であったのかというのがひとつ。もうひとつは敗残国の将軍というものが、どうしてこんなに重用されるのかという疑問。後者に関しては重用されたのは百済の軍人だけではない。これも李論文の中にあるのだが、この時亡命してきた百済官人の多くは、日本において、ほぼ故国の官位に対応する地位を天智朝より受けているのである。この優遇処置はいかなる理由によるのか。

> このことは新来の百済官人を、何ら違和感なしに受け入れる土壌を大和政権がそなえていたことを意味するのではないか。いいかえると、朝鮮式山城を拠点とする戦闘方式になじんだ百済系渡来人が（すでに日本の）権力の中枢にいたとすれば、天智年間の築城も説明がつく。
>
> （『鬼の城の渡来人』）

ここで注意しておきたいのは、李氏の使う「渡来人」というのは、この時の亡命百済人のみでなく、もっと昔、日本の国家成立以前の渡来者をも意味するということである。というのは〈渡来〉というのは、従来いわれてきた〈帰化〉に対立するものとして出て来た概念であるからである。〈帰化〉とは〈帰化し得る国家〉の存在があって初めて成立するものであって、それ故に国家という概念さえもたなかった頃、この地に移って来た人々は単に「海のかなたから来た人」とか「新たに来た人」（今来の才伎・イマキノテヒトという言葉もある）とかにすぎなかったのである。

そして、考えてみれば、わが国はこういった人々によって構成されてきたのであり、その時々の渡来の波は、そのつど大きな文化的・政治的インパクトとなりつつ古代国家形成へと向かってきたのである。この渡来の大きな波としては、稲作導入－弥生文化の列島席巻なども上げられるが、とあえず今関係するのは５～６世紀の〈渡来人〉についてである。

五世紀末から六世紀にかけて、新羅や伽倻、百済などからかなり波状的な渡来がみられる。そのころ朝鮮では征服戦争が激化しているので、かれらは戦乱を逃れてきたのであろう。弓月君（秦氏の祖）が１２０の県の人夫を率いて渡来し、阿知使主（漢氏の祖）が１７県の党類とともにやってきたと伝えられるのは、集落あげての渡来があったことを意味する。百済系の漢氏は大和・河内に集中しており、秦・伽倻系氏族は、筑前・豊前周辺、備中・備前、隠岐、播磨、摂津、山城などに分布し、越中・越前にもみられる。

（『朝鮮と日本の古代山城』）

朝鮮半島における侵略征服戦争は、５世紀後半北方高句麗の南下政策によって本格化した。さらに６世紀に入ると、南転を余儀なくされた百済と国力を充実させた新羅の間で、朝鮮南部安羅・伽倻地方の争奪戦が展開されることとなる。

倭国もこの乱に乗じて、半島南部への進出を目論んだようだが、どうも終始「カヤの外」（シャレじゃないよ）という感じであったらしい。わが国が、戦乱を逃れる人々の亡命先に選ばれたのもそんな事情によるのであろう。この時期の渡来の波はかなり大規模なものであったらしく、そのことは文献上からも解るが、弥生時代の始まりと同じく、わが国の文化や生産のあり様に、一大画期を成したことでも証明されるのである。

まず農業においては、この頃従前の乾式農法に換わって、水田耕作が始まっている。水田耕作には高度な灌漑水利の技術と、それを可能にする鉄具（スキとかクワとか）の大量生産が不可欠であるが、それが欠けていたために今まで手もつけられなかった沖積平野が、渡来人の出現によって開拓され、稲作可能地となる。

これらの技術をもった渡来人たちは、当然地方の先住豪族たちに重用されたであろう。否、生産力の増大がそのまま政治世界での威力を生むとするなら、彼ら自身が豪族化したということも充分考えられるのである。

『吉備郡史』の中に有名な「大和の如きは事実上の漢人の国、山

城は事実上秦の国」という一節があるそうだが、この「事実上○○の国」という状況は、いちいち克明に調べた訳ではないけれども、通常考えられる以上に広汎に見られるものではなかったろうか。

『播磨国風土記』に次の様な興味ある記述がある。

「・・・又、城牟礼山といふ。あるひといへらく、城を掘し処は、品太の天皇の御俗、参度り来し百済人等、有俗の随に城を造りて居りき。」

〈有俗の随に〉というのが、重要である。沖積平野に定住した渡来集団は、次に故国の習俗に従い、自分達の生産地の背後の山に全住民が避難できる山城を築いたのである。山城の規模の大いさとその労力から推し量って、何か中央政権のバックがなければ作れないはずという向きもあるが、戦乱の地をやっとのがれてきた集団が、何を一番大事と考えるか、言うまでもなかろう。

これが西に本格地に点在する「神籠石」の正体であると李氏は言う。神籠石の石累の加工・組合せ技術、築城を可能にした力量によってくる所為、さらには所在地の任意性、そして、現在神籠石周辺に残っているハタとかカヤとかの地名、これら全てが渡来人による築城という指標をさしているのである。

> 日本古代史の展開を考えるうえで、渡来氏族のはたした役割を見直すことが改めて重要な課題となってきているのは、かれらが巨大な山城を残したからだけではない。かれらは製鉄、土木建築、金属工芸、機織などの新技術だけでなく、文字や宗教、医、易、暦などの諸学術をもたらし、日本古代文化の形成・発展に寄与するのである。欠落しがちだった渡来氏族や渡来文化に対する認識が「神籠石」の研究をも立ち遅らせたといえるのではなかろうか。
>
> （『朝鮮と日本の古代山城』）

以上が李進熙氏の渡来人築城説の大要である。

私のことを他人の引用ばかりしていると悪口を言う人もいるが、引用くらいで驚いちゃいけないよ。わが『山城志』は、かつて他人の雑誌からコピーでとった図や写真を勝手に使ったこともあるんだぞぉ～。あんまり自慢にはならないけれど。まあそれははそれとして少しは私の勉強ぶりも示さねばなるまい。

■神籠石と朝鮮式山城

以前に、私は神籠石と朝鮮式山城（天智年間の）という風に、山城が二系統あるように見えるのは、単に文献上の記録が残っているか否かの差位にすぎず、これは一括して朝鮮式山城としていいのだと言った様に思う。

で、今考えてみると、それは構造上より見れば確かにそうなのだけれど、それでは何故その様な文献上の差異があるのか、言い換えるならば、天智期以降も命脈を保った山城と、それ以前に山城としての機能を停止した（と考えてよかろう）山城とはどこが違うのか、これには深いわけがありはしないかという問題に対して無神経であったようだ。このことは、先の李氏の説では次のように考えられている。

この二系統の山城は、共に６～７世紀に渡来集団によって作られたが、神籠石系と呼ばれる山城が、秦や伽耶系氏族のそれであるのに対して、天智年間の山城と伝えられるものは、百済系氏族の手によって築かれたという違いがある。そして、白村江以降に亡命してきた百済の将軍たちは、百済系の山城のみに手を加えて大和防衛にそなえたのであり、神籠石系山城が『日本書紀』に名をとどめていないのは、それが百済系氏族の資料にのみよって編纂されたからである、と。

どうもここまでスッキリ分けられると、余りにも符牒が合いすぎて、私は、いまいち信用できない。李氏の説に従うなら、もともとランダムに築かれたはずの渡来人逃げこみ城の内、偶然にも百済系山城のみが、本土防衛構想にうまく合致したことになってしまう。

私はやはり、この二つの系統は、それが同時期に築かれたとしてももちろんいいけれども、次の段階でその時代の用途にかなったも

のだけが生きのこれるという様にして出来たものであると考える。

また、神籠石を民間（地方豪族）、朝鮮式山城を「国家事業」という風に分ける向きもあるけれど、現在の様に「役所仕様」と「民間仕様」が並立していた訳ではない。

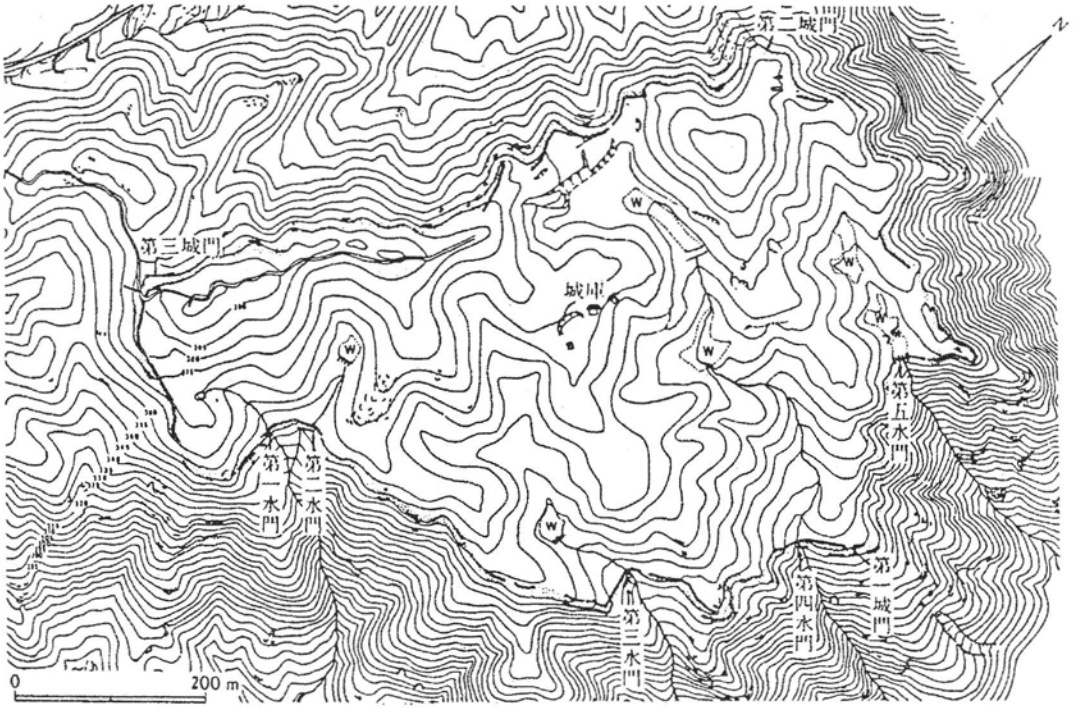
試みに「山城分布図」でも広げて見てもらいたい。すると、神籠石系山城というものが、ほとんどの場合、他の山城との関連性を考えることができぬくらい孤立してある印象を受けるであろう。それは、天智期の山城がまがりなりにも大和防衛という意図で貫かれているさまとは対照的である。

つまり、神籠石とは李氏のいう如く、渡来集団によって築かれたのであろうけれども、これらの人々にとって守るべきは、せいぜい自らの居住するブロック位であったろうし、また国家の段階としても、そうでしかありえなかったのである。

（北九州、とりわけ有明海東岸の神籠石群は、も少し互いの関連と広い範囲での防衛構想というものがあったようである。最近読んだ原田大六氏の本によると、古代には玄海灘をわたる北航路と別に、有明海沿岸を起点とする大陸ルートがあり、磐井を中心にして相当広い勢力圏を形成していたようである。磐井の墓といわれる岩戸山古墳を中心とした神籠石群は、「磐井の反乱」に使われたとか、使われないとかではなく、この地を特色づける装飾古墳群や石人・石馬類と並んで、大陸との密接な関係－この関係とは攻撃の対象になることも含まれている－を証明するものとしてとらえねばならぬ。おそらく国家以前の段階においては、この筑紫や吉備や、そして畿内やといったブロックが並立しており、浅からぬ関係ではあるが、一体でもないといった状態であったのだろう。「神籠石」とはこおゆう時代の意識のあり様を象徴しているものと思われる。）

「磐井の反乱」を鎮圧し、「大化の改新」から「壬申の乱」と古代国家形成へ登りつめる途上の天智期にあっては、このような古い意識の産物である狭域防衛山城は、全く役に立たなかった。

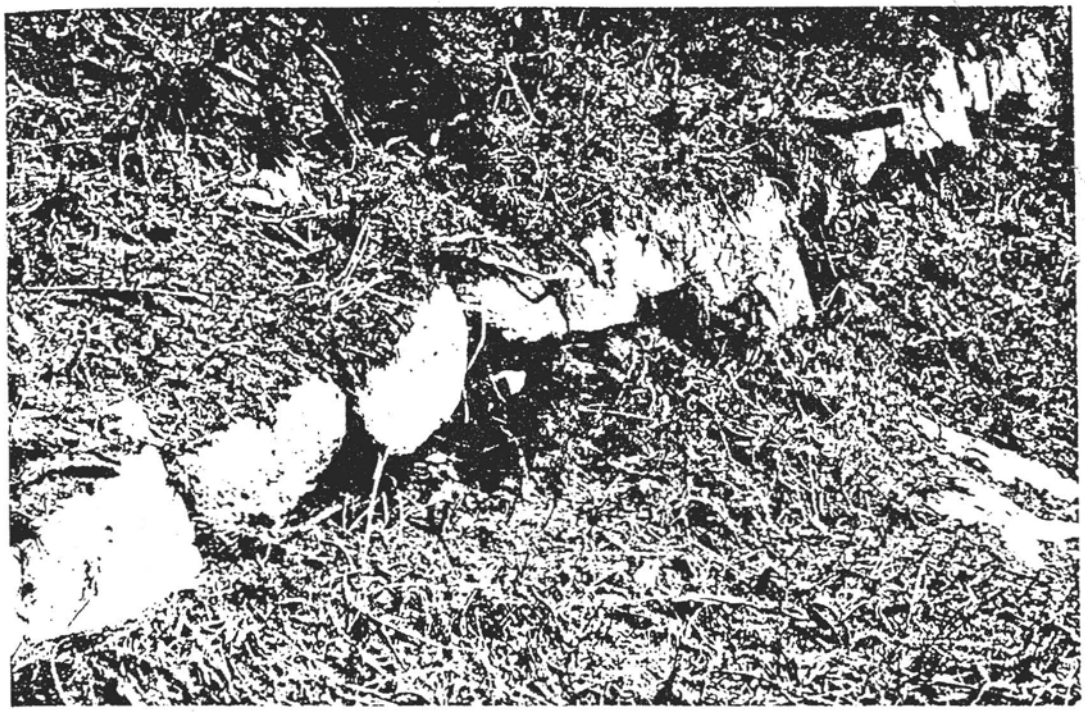
亡命してきた百済の将軍が、まずしなければならなかったのは、こおゆう性格の神籠石の選別一体系換えであった。その山城がもともとあったものなのか、その時新たに築いたのかは、今の私にはどちらでもよいことである。



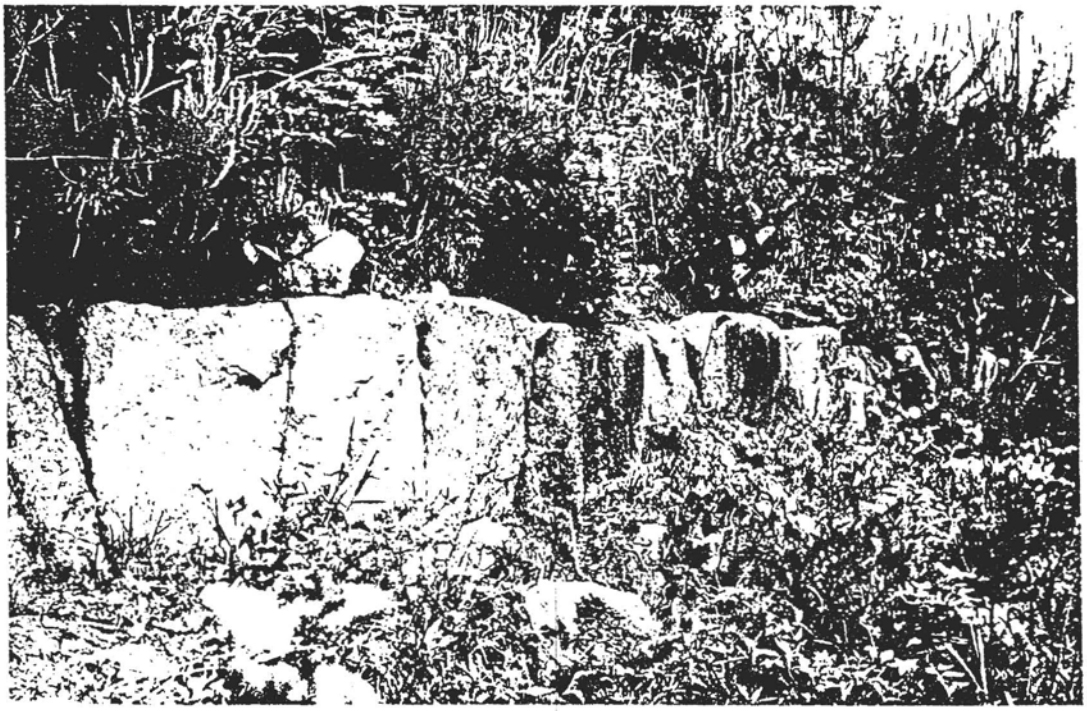
城域（S＝1：8,000）

備陽史探訪の会事務局
〒720　福山市多治米町5－19－8
☎　0849（53）6157
編集・文責　平田恵彦

平成6年2月6日発行



神龍石状列石 1



神龍石状列石 2